



その21

シーボルト

(令和3年5月1日号—第332号)



フィリップ・シーボルトは、1796年、ドイツで生まれました。

1823年（文政6年）に長崎、出島のオランダ商館付の医師兼自然科学調査官として来日。私塾を開設し西洋医学を伝える一方、オランダ政府の命により、動植物や鉱物、民俗資料を集めました。

1826年（文政9年）、シーボルトはオランダ商館長の江戸参府に随行。当時、外国人が日本国内を自由に旅行することは禁止されていたため、シーボルトにとって日本のことを調べる絶好の機会でした。



現在の淀川の景観

長崎から江戸へ向かう道中、シーボルトは枚方に立ち寄っています。当時の枚方は

東海道の宿場町で、淀川舟運の中継港としても大いににぎわっていました。彼が記した紀行文には、昼食をとった枚方宿のにぎわいや、若い女性が大勢いるまちの様子とともに、「枚方の環境は非常に美しく、淀川の流域は私に祖国のマインの谷を思い出させることが多い」と称賛しています。

1828年（文政11年）、オランダへ帰国する際、持ち出しを禁じられた日本地図などが積荷に含まれていることが発覚し、国外追放処分となりました（シーボルト事件）。帰国後は、日本で集めた資料や知識を基に、日本についての本格的な研究書である『日本』や、日本の植物、動物を紹介する『日本植物誌』『日本動物誌』などを出版。また、日本の植物を栽培し、ヨーロッパに普及させました。

国外追放が解かれた後、1859年（安政6年）に再び来日。幕府の外交顧問などを務め、日本研究を続けました。3年後、長崎から帰国し、1866年、70歳で亡くなりました。